

柏谷共有株場分轄

明治二十六年三月柏谷内山共有株場ヲ各組ニ分轄  
大正九年三月柏谷内山共有株場個人又ハ各組ニ相当価格ヲ以テ賣却シ  
道路費酒房青年度学舎等ノ基本金ヲ作ル

城山分轄

大正九年三月城山ヲ各組ニ分割シテ櫻ヲ植ユ

御料地拂下ゲ

明治四十一年御料地拂下ゲ伊豆国田方郡函南村大字中井地籍字谷下  
一ノ七百四十一番山林及別式拾九町大及七畝式拾陸歩外ニ原野及別  
八反六畝拾歩但シ旧及別式拾四町四反八畝歩ハ共有地持分權利ヲ得ク  
リ此時松杉檜等ノ植付ヲナス

第一期伐採

右ノ内松立木ヲ賣却ス此配当金一株高リ拾拾参円

此歩合 拾分参分五厘ノ七拾八分ノ一 (但シ高株高リ)

両谷下山分轄

昭和三年二月七田大土肥柏谷畑毛丹那ノ入會山大字中井地籍両谷下山  
ヲ分轄ス 但シ一戸平均五反歩ノ高リ

新道開鑿

明治拾五年字宝蔵新道路開鑿 此受負人熱海市青木作二郎氏  
土二人夫賃金一人金拾五円也

縣道成立

大正拾五年十一月三日附大土肥久保ヨリ畑毛道示告示第五四一号ヲ以  
テ縣道ニ編入スト時ニ田正美氏縣議中ナルヲ以テナリ

郡制廃止

大正九年郡制廃止シテ實業團ヲ置ク

斬髮

古ハ箭髮ヲ大ナル耻辱トス剃髮シテ禮トナリ以テ死ヲ免ル者又箭髮  
シテ罪ヲ謝スル者或ハ神佛ニ祈リ大願成就ノ者ハ御礼参リニ箭髮友レテ  
神佛ニ奉納スル者マリ故ニ神佛前ニ幾多箭髮毛有リ明治二年始メテ  
斬髮令下ルモ容易ニ之レヲ實行スル者ナク先ヅ武人官吏ヨリ始メトシ  
明治八年頃ヨリ地戸役場吏員及村役人等ニテ下級民ニ於テハ箭髮ヲ  
大ナル慙愧トシ容易ニ實行セズ明治十五年頃迄ニ至リ漸ク實行スル  
ニ至レリ然ルニ明治四十年頃ニモ結髮ヲ希レニ見ルモノアリタリ

当時下流行ノ歌  
 さん 髪友あたまを叩いこ見れど、文取用化の音がする

時計

昔ハ我國ニ時計製ク日光ト磁石ニテ時ヲ計ル伍民間ニマリテハ毎戸ニ  
 鶏ヲ飼養シ其鳴キ声ニ依テ時ヲ覚ルナリ故ニ之ヲ鳴鳥ト云フ其ノ肉ヲ  
 食スル者ナシ老鳥ニ至リテハ地方ニテハ三島大社ハ飼料ヲ添ハテ奉納  
 ス野飼ニシテ其ノ巢ハ毎戸向口ノ高キ所ニ置クヲ規定ノ如シ中古ニ至  
 リテニ支ノ時計ヲ見ル即ケルハツセツ大ツ五ツ四ツ是ナリ  
 亦往古ニテハ日時計水時計アリ日時計ハ大陽ノ光ヲ棒ニ受ケ時ヲ計リ  
 水時計ハ一定ノ器ニ水ヲ入レ下部ニ小サキ穴ヲアケソレヨリ水ヲ出シ  
 下ノ器ニ入レ水ノ量ヲ目盛ニテ見テ計ル

車

旧幕時代迄ハ車輿ク農業者ハ堆肥山ノ草刈リ薪取りハ肩持ケニテ一  
 日ニ二荷馬持ハ一日ニ一駄其他耕地肥出シ福麦上ゲ等皆肩持チ又東  
 海道御大名ノ御通行ノ節ハ地方ノ百姓共ハ召集ニ應ジ東ハ小田原西ハ  
 原吉原迄乗り物長持先箱其他所持品一式ハ馬又ハ肩ニテ箱根山ヲ送迎  
 ス一頭カシラ、大名御通行ニハ何百人要ス但シ辨荷持参ニテ僅カノ賃金  
 ニテ使役サル恰モ蟻ノ行列ノ如シ其ノ慘酷ナル事恰モ牛馬ヲ使役スル

ニ等シ願リ見レバ明治ノ御恩徳ハ此昭代ニ遭遇セル我等國民ハ之  
 成功ノ由来ヲ辨ヘヨク車明治三年東京ノ某ノ發明ニシテ地方荷車ハ板  
 車ニテ改良ニ改良ヲ加ヘ今日ニ至ル又自転車ハ始メ木製ニテ前輪ヲ足  
 =テ踏ム明治三十年ゴム輪ヲ見ル事稀ナリ

横 穴

柏谷城山下ノ山間百有余ノ横穴アリ大古ノ事窺フ可カラズ中古僅カニ  
 百ハノ穴ト称ス穴ニ大ヨリ最モ大ナルハ高サ大尺廣サニ尙四方ノ穴  
 又穴ニ通ズルモアリ傳ヘテ元穴又ハ抜ケ穴ト称ス中ニハ上段ノ間ヲ有  
 スルモノアリ一々探査セバ種々形式ノ異ナルヲ見ルベシ近世穴端又ハ  
 連接地ヨリ刀剣其他古器初頭骨(奈良朝以前ノモノナリト云フ)ヲ掘リ出  
 ス事アリ喜田文學博士ハコノ穴ハ横穴ヲ有スル古墳ナリト謂ヘリ

猪 土 子

昔ハ東山ヨリ猪狼狸等群ヲ成シ人畜作物ヲ為ス之ヲ防グ爲ニ井ヨリ  
 大橋ニ至ル堤防ヲ築キ垣ヲ造リ旧切り通シイザリ坂又ハ休ニ場ノ台ト  
 ニケ所ニ木戸ヲ造リ是ヲ毎戸順次ニ木戸ノ閉鎖ヲナス之ヲ猪土子ト  
 云フ今尚堤防存セリ又門外ノ大橋堰戸ノ如キハ作人ガ火繩ヲ毎夜置キ  
 テ之ヲ予防トス又素村丹那方面ニ於テハ防グニ途ナキ故ニ作初ハ火  
 繩ヲ用ユルモ家畜ノ如キハ鹿口ニ閉キ戸ヲ付ケ置クナリ追々ニ鳥獸ヲ

食スルニ至リ自然其ノ害少ナキニ至レリ明治十年頃ヨリ木戸ノ用鎖ヲ  
廢ス故ニ昔ノ住宅ニハ物見ノ窓アリ之レハ朝早ク起キ猛獸ヲ見ル窓ナ  
リ又鉄砲床アリ鉄砲置場ニ造レルナリ

廿刈敷 廿刈り

明治四十年頃迄ハ八會山宇谷下山ヲ止メ山トシ仁田柏谷大土肥畑毛丹  
那交代ニ火ノ番ヲナシ毎年五月中旬旬廿敷廿刈ノ布ヲ出シテ廿刈り始メ先ツ  
前日ニハ仕度ノ爲休日トシ親戚ヨリ手傳ヲ度ケ酒奠餘ソバ等ノ馳走ヲ  
ナシ夜中ニ起キ篝火熨灯ニテ老幼婦女子ニ至ル迄登山ナシ先ツ一人  
三駄ニ把即ケ(三十把)ヲ規定トス午宿ニ時頃ハ帰宅シ入浴又ハ誼宴會  
御祭リサワギ其草敷日干草シテ里ニ降シ田植ノ際ニ上散シテ田植  
スル之ヲ結ヒ把ト云フ

養蚕 蚕

昔ハ有志家ノ自家用ニ飼育スルモ明治九年蕪山製糸場ヲ起シ之ヲ生  
産會社ト云フ明治二十七年頃漸ク繭生糸ノ共進會ヲ開クニ至リ當時  
一貫匁金三四位ヒ農家ノ副業トテ經濟上最モ必要ナリト追々進歩シ現  
今農家經濟第一ノ單位タリ然ルニ大正七八年ハ一貫匁七八位或ハ十四  
位昭和五七年頃ハ一貫匁一匁五十匁乃至二匁位ニテ養蚕衰ヘルモ昭和  
八年春春蚕五匁ヨリ七匁迄ニ騰リ農家モ亦笑顔トナリ徒來仲買ト

個人經營市場ニ出荷セルモ其ノ取引ノ欠陥ニ鑑ミ郡ヲ單位トセルモ  
業組合法ニヨル爾市場ガ大正十五年度ヨリ設立セラル、ニ至ルヨリ  
現時該市場ノ利用ヲ爲シツクマリ

金十円  
昭和十四年春春畜産  
金十三円  
昭和十四年秋畜産  
金十五円  
昭和十四年十月乾燥畜産

### 畜牛

明治二十九年頃ヨリ本郡産乳ノ首位ヲ占メ到底他郡ノ追従ヲ許サズ本  
邦有教ノ乳牛也トシテ世評ノ焦莫タラシメタル其ノ反面ニ於テハ  
先覺者ノ血ト涙ノ結晶ト煉乳会社ノ功績トヲ没却スル事能ハズ由來  
豆國ハ輕曳カ強キ伊豆(石科牛)飼養セラレタルモ、バ遠キ昔ニシテ  
ハ其ノ痕跡ダニナク畜牛悉クホルスタインニ種ノミトナレリ

### 鮮牛

農林系經營上努力調節ニ必要欠クツカラザルハ好役畜ノ使用ニアリ然  
シテガテラ徒來迄ハ駄馬馬力ヲ使用スルモ役畜中鮮牛ハ飼養管理  
容易ニシテ労役上温順ニシテ取扱易ク故ニ鮮牛ノ共同購入ヲナサ  
トシテ茲ニ柏谷郡農會發起ノ許ニ組合(組合長外十九名)組織シ購入  
資金參陣田ヲ考テ年々増トシテ日本勸業銀行静岡支店ヨリ借入ヲナス

癸起年月日  
 借入年月日  
 癸起者  
 昭 昭  
 和 和  
 五 五  
 年 年  
 一 一  
 月 月  
 五 五  
 日 日  
 三 昭  
 田 和  
 善 五  
 之 年  
 助 二  
 月  
 廿  
 日  
 佐 三  
 藤 田  
 友 善  
 吉 之  
 一 助  
 日  
 右 評  
 鮮 価  
 牛 後  
 受 相  
 = 選  
 際 レテハ 評  
 申 立 ヲ ナ サ ツル モ ノ ト ス  
 大 震 災  
 大 正 十 二 年 九 月 一 日  
 傷 無 キ モ 関 東 ハ 甚 大 其 ノ 属 大 火 災 ヲ 起 シ 佐 藤 波 次 郎 氏 ノ 弟 正 八 横 次 = 死  
 テ 惨 死 ス 三 田 善 之 助 氏 ノ 弟 瀧 = 郎 五 横 次 = テ 惨 死 ス

昭 和 五 年 十 月 二 十 六 日 午 前 四 時 三 分 北 豆 大 震 災  
 函 南 村 = 於 テ ハ 惨 死 者 三 十 五 名 負 傷 者 四 十 名  
 柏 谷 三 名 負 傷 者 四 名  
 大 正 十 二 年 九 月 一 日 大 震 災 = 柏 谷 = 於 テ ハ 殆 家 屋 半 潰 人 畜 = 死  
 傷 無 キ モ 関 東 ハ 甚 大 其 ノ 属 大 火 災 ヲ 起 シ 佐 藤 波 次 郎 氏 ノ 弟 正 八 横 次 =  
 テ 惨 死 ス 三 田 善 之 助 氏 ノ 弟 瀧 = 郎 五 横 次 = テ 惨 死 ス

三 田 善 之 助 長 女 たい子 二十一歳 負 傷 者 四 十 名  
 野 田 藤 作 長 女 やえ子 十七歳 負 傷 者 四 名  
 後 藤 国 次 郎 二 女 はな子 二 歳  
 函 南 村 全 潰 住 宅 六 百 三 十 軒 羊 潰 四 百 九 十 軒  
 内 柏 谷 二 十 八 軒 羊 潰 四 十 方 軒

函南村非住家全潰 五百七棟  
内指谷々 五棟

丹那隧道工事大要

非住家半潰 三百余棟  
非住家半潰 三十余棟

丹那隧道ハ現在東海道本線国府津沼津間ノ改良工事ナル熱海線中伊豆  
半島ノ主山脈ヲ東西ニ横断スル隧道ニテ熱海町ノ西方高地海拔(二三〇呎  
ノ莫ニ起リ瀧地山(三〇六〇)及丹那盆地(七七〇呎)直下ヲ貫通シテ三島町ノ  
東方約一里半函南村大竹ニ終ル總延長四哩九ノ複線型ノ大隧道ニシテ  
世界長大隧道中屈指ノモノナリ  
丹那隧道貫通地帯ノ地質  
本隧道ハ舊熱海火山ノ陥落火口壁ニ當ル瀧地山ヲ掘鑿スルモノニシテ  
第三期層灰岩ヲ基底トシ大體東西ニ向ッテ傾斜シ不整合ニ西復  
ハル熱海火山ノ噴出岩即チ凝灰石集塊石輝石安山岩質熔岩ノ互層ヲス  
テ構成セラレタル地質ナリ又處々輝石安山岩質熔岩ノ互層ヲ見  
而シテ本掘進路線ハ地質構造上ノ破綻線ノ經過地帯ニ相与スルヲ以テ  
断層ノ發達甚ダシク其ノ大ナルモノニ至リテハ粘土帯ノ輻員作用ノ為  
質ニ変セル温泉餘土アリテ支保工ニ重荷ヲ與ヘ或ハ又粘着力ナキ流出  
砂層ノ千呎ニ亘リテ賦在スル等工事上多大ノ困難ヲ及ボシタモノナル  
隧道掘進ニヨリ湧水ハ工事史上稀有ノモノニシテ其ノ湧因ハ隧道ヲ  
構成スル山嶽ガ断層作用ニヨリ著シク裂鏡手亀裂發達シテ多孔性



トナレル為メニ其中ニ含有セル地下水が湧出セルモノニシテ安山岩砂層及断層脊部ニ於テ持ニ甚ダシク湧水ヲ見タリ

丹那盆地地質調査

本隧道ノ通過地帯ニ当リ丹那盆地ト称スル凹地ノ凹地アリ之レが成因ニ関シテハ従来地質學者間ニ水蝕作用説断層作用説等唱ヘラレテ決定ヲ見ガリシガ誠ニ難作業並ニ實際掘鑿ノ結果ハ数多ク断層群ニ由ル陷落地帯ナル事ヲ確メ得タリ

設計

延長

二萬五千六百十四呎

東口坑門

西坑周ヨリノ掘進状態及自然流下ニ鑑ミ

自

至九八七三呎間

自九八七三呎

至三六八五呎間

三百三十分一

自

至五八二二呎間

自五八二二呎

至九六〇三呎間

四百四十分一

自九六〇三呎

至一二〇九三呎

三百十分一

何レモ上ヨリ勾配トシ其中間ハ六三呎ハ水平トセリ

掘鑿ノ方式

主トシテ横太利式ニ依ル排水能力一秒钟約

百五十五方呎ノ排水専用ノ隧道ヲ主體隧道ノ左側ニ五十呎以上高際  
 ン隧道ノ全長ニ亘リテ築造ス 排水隧道ノ底面ハ主體隧道施行基面  
 ヲリ五呎三吋低クシテ隧道中央ニ設備スル溝(深サニ呎中三呎)ノ流水  
 ヲ連絡坑ニ依テ該排水隧道ニ流下セシム  
 丹那隧道工事費額ト起工竣工時期  
 工事費予算額約金貳拾四萬六拾万円(昭和八年八月)  
 工事費未算額約金貳拾參萬八拾七萬五仟円(昭和八年八月末)

着手

母貝通

東口大正七年四月一日 水抜坑母貝通 昭和八年六月十九日  
 西口大正七年七月五日 底設導坑母貝通 昭和八年八月二十五日

東口ハ請負人 鐵道工業株式合資會社  
 西口ハ請負人 鹿島精工ヲ持命人夫供給者ニ指定ス  
 隧道貫通祝賀會 昭和八年拾月貳拾日

此時招待サレタ人々ニ各々記念品トシテ南部燒鉄瓶ヲ贈与サル  
 柏谷ニ於テ招待サレタ人名

- 當時村會議員 佐藤 敏
- 當時消防部長 佐藤 忠永
- 養源寺住職 田 迎玄龍
- 修禪院住職 安藤 玄祐

貴通祝賀会ハ現場ニ於テ舉行 先ヅ神宮僧侶ハ儀性者ノ慰靈祭ヲ施行  
投ガ餅數十億アリ 各字青年假裝行列 花火等アリ 有志祝辞

大正十年四月一日東口作業中従業員三十三名埋没八日間ノ日子ヲ閲シ  
テ生存者十七名残余ハ全部犠牲トナレリ

大正十一年二月十日西口突然泥砂噴出作業人夫十六名閉塞サル此時村  
消防部員救助作業ニ従事ス

大正十四年十二月三十日(東口)翌年一月七日ヨリ同月十二日迄盛ニ土砂  
流出其ノ量約三百三十坪ニ達セリ従事員一同災事

昭和五年六月二十四日大新層ニ出會シ一時湧水八十七個ニ増加シ土  
砂八百五坪ヲ流出シ一同災事

昭和五年十一月二十日伊豆地方大震災被害ハ東口数ヶ所小震裂ヲ生  
セル程度西口ハ大ニ震裂ヲ生シ殊ニ坑口ヨリ九十九百五十呎附近ニ側

壁及拱ニ大ニ裂生シ上砂約百八十五坪崩壊シ従事員五名埋没シ内ニ名  
ハ救助シ三名ハ儀性トナレリ

東口ハ西口ニ比シ約四寸隆起セリ

工事竣工 昭和九年十月一日

大場方面ノ各料理屋カラ持込ニダ御馳

開通式 開通式 昭和九年十二月一日  
待望正ニ十年文化ノ惠ニ浩ス歡喜世界的難工事完成シ全伊豆、狂茂

舟那陸道今曉開通ス十六年ノ日子トニ四百三十万田ノ巨費六十  
事ノ完成ヲ見ルニ遂ニ科學ハ自然ヲ征服シテ今日ノヤタリ世界的  
次グ第一ニ於テ正ニ世界的第一ニ於テ其ノ工事ノ困難ハ昭  
和九年十一月一日午前十時遂ニ開通シ茲ニ公式運轉ヲ開始シタ  
今見ル此ノ新聞紙モ舟那陸道ヲ運バレタモノデアラフ新首紙ニモ  
感激ガコモロウト云ハズレテ何ト親明シヨリゴ東京迄ノ運轉時  
ニヨリ東京迄ノ運轉時ニヨリ東京迄ノ運轉時ニヨリ東京迄ノ運轉時  
同縣民ノ狂喜ハセヌ喜ビモトヨリ日本ノ歡喜ハ言ハスモカナ  
祝賀會が開カレルソノ氏教ト云フマキデヤロウ第一島町ニ於テ  
皆文化ノ惠ニ浩ス歡喜世界的難工事完成シ全伊豆、狂茂  
祝賀會が開カレルソノ氏教ト云フマキデヤロウ第一島町ニ於テ

東海道線ノ偉容整ヒ伊豆感激ニ躍ル三島開通式

燦然ト耀ク十一月一日丹那開通ノ日ハ遂ニ東海道線ハ躍ルノガ  
今日ゾ歴史ニ残ル丹那トシテ全通ノ日デマル全伊豆線ガテ幾十年間  
今日ノ日ヲ待望シタコトガ鐵道有テハ午前十時内田鐵相田中知事  
横山神奈川果知事ヲ始メ朝野ノ名士三千五百名ヲ招イテ三島駅頭デ晴  
レノ全通式ヲ挙行スル大正七年四月一日丹那熱海口ニハツバノ音ガ  
轟然トマゲラレテ以來十有八年八月一日近代科學ノ粹ヲ駆使シ三千五百  
万圓ノ巨費ト人柱ヲ埋メルコト六十七延人員二千五百万人ノ力ハ遂ニ  
大自然ヲ征服シ丹那トシテニニ東海道線トシテ  
目ノ大トシテトシテ我國鐵史上画期ノ廣軌複線式ニ東海道線トシテ  
ノ威容ヲ具備シテ完成シタ今日下リ急行十列車ヲ處々列車トシテ  
ヲ感激ノ全伊豆三島沼津函南熱海及修善寺長岡古奈畑毛ノ各温泉場  
ヲ始メ伊豆ヲ攀ゲテ今日カラ三日周旗提灯行列山車假裝行列花火音  
頭等々各種ノ催シニ爆発的歡茂ト豪華十祝賀園繪ハクリヒロゲラレ  
タノダ

餘興ノプロ 三島ノ會場

祝典ヲ舉ゲル緒明郎ハ三万坪ト云ハレハ大庭園デマルガ何分當日ハ四  
千ノ来賓地元三島伊豆各温泉場ノ接待人見初人デ萬余ヲ収容シ盛祝ヲ  
呈スル事トナラヤガ當日ノ祝賀會餘興順序ハ左ノ如ク決定シタ

三島藝妓四季ノ唄  
 長岡温泉藝妓マヤノ音頭  
 修善寺温泉藝妓夜叉王甚句ガジカ音頭  
 古奈温泉藝妓古奈音頭、白菊音頭  
 長岡小唄、源子万歳  
 敷海ノ祝賀ノプラン  
 以上

三島市立小學校ニ於テ舉行何レモ盛會ナリ

縣 郡ノ改正

明治元年六月二十八日 並山縣ヲ置ク  
 明治四年十一月十四日 並山縣ヲ廢シ足柄縣ヲ置ク 並山ハ其支廳トナル  
 明治九年三月十八日 足柄縣ヲ廢シ靜岡縣ニ合併ス  
 明治十二年三月二十五日 君澤田方郡役所ヲ三島ニ置ク  
 明治十九年君澤ヲ廢シ同年四月一日 田方郡トナル  
 目下三所ニテ大々村ヲ管ス  
 明治二十二年二月二十六日 縣令第十七号ヲ以テ駿東郡日守村ヲ田方郡ニ編入ス  
 明治四十一年 三島記念館建設 金壹万叁千八百九十九圓ヲ以テ之ヲ建築ス

# 佛教慈光會

田方郡佛教慈光會ハ大正二年二月二十四日創立ニシテ其ノ目的トス  
ル所ハ專ラ免囚者ヲ保護シテ正業ニ就カシメ重犯ヲ未登ニ防過セ  
ントスルニ

# 愛國婦人會

愛國婦人會ハ明治三十四年、創立戰死並軍中戰死ノ遺族及癩兵ノ救  
護ヲ目的トスル

# 函南村男子青年團

明治四十二年創立 男子青年團員ノ修養機關ヲ目的トス

# 函南村女子青年團

大正十一年一月七日創立 男子青年ト同じ目的

# 函南村婦人會

大正十五年十月十七日設立 婦人、徳操ヲ高メ智能ヲ磨キ家庭及社会ノ改善ヲ図ルヲ以テ目的トス

### 柏谷婦人會

始メ明治四十二年若宮町東町ノ二組ヲ組織シ貯蓄ヲ旨トシ家庭社会ノ改善ヲ図ル目的ヲ以テ先ツ二十口、貯蓄箱ヲ造リ一月一回ル事ニテ其ノ金高ハ一戸壹貳或ハ四弍位ガ最高ニシテ昭和二年迄経続シ十九年同ニ亘ル是ヲ善種金ト名ヅク此ノ金ハ公共或ハ救済ノ目的トス

此ノ金ハ公共或ハ救済ノ目的トス

佐藤辰弥  
佐藤友吉

大正七年柏谷全婦人會トナリ各組ニ於テ貯蓄ヲナス  
大正十五年十月十七日西南村婦人會ニ合併セラル依テ柏谷支部トナル  
第一期支部長 佐藤みゆ

昭和十四年調

一金壹百圓  
善種金投入

若宮町東町

岩崎翠作



道路

東所道路ハ從來柏谷五道路ニ同中ノ所昭和九年組合道路ニ編入セラレ  
二同ヲ三同道路ニシテ柏谷入口昭和十年九月十四日録入ニテ縣道ヨリ  
酒屋ノ下道是ヨリ東ニ分レ柏谷五持道路旧九尺ヲ昭和十三年三月十七  
日録入レニテ三同中トシ觀音前道此觀音橋旧石橋四枚ヲ此時松林  
ヲ以テ三同中ニ増架ス之レハ温泉組合ニテ三同道路ヲ工事ス  
藏ケテ保道路ハ旧大尺ノ所昭和十三年九月三同道路トス温泉組合ニテ  
工事ス  
昭和十四年四月酒屋下ヨリ負石道延長ス

新年廻禮

先氏神祖先ニ参拜シ元日ハ先ツ門松ヲ立テ七五三纒ヲ張り裏白讓葉  
橙串柿萼ヲ付ケテ飾ル親戚ハ勿論村中毎戸年賀ノ廻礼ヲナス中ニハ有  
志ノ家ニテハ酒肴ヲ馳走ス

四日

初山一月四日仕事始メトシテ山ノ神又ハ氏神ニ参拜シテ切り餅ヲ供ヘ  
テ登山レ又欽始メトシテ田ニ録入ナシ神ヲ立テ餅ノ紙ヲ結び七五三ト  
ス僧侶ノ年賀ハ此日ヲ定日トス

七 草

一月七日ノ朝七種ノ食用植物ヲ集メ粥ヲ作り七草粥ト云フ一家おケ揃  
ヒ之ヲ食ス菜ヲ切ルニあり云ヒ傳ハタル言葉アリ ナツク何ニ  
菜切リ包丁ニ姐唐土ノ鳥ガ日本ノ国ハ渡ラヌ先ニ合セテハツタバタ

八日節句

二月及ビ十二月八日ノ酉月ノ八日夜赤飯ヲ炊キ握リ餃トシ味噌ヲ付ケ  
之ヲ食フ戶外ニ松ノ枝ヲ挿シ且目一ツ小僧ノ入ルヲ防グト或ハ籠ニ格  
ヲ付ケ高ク竿頭ニ懸ケ其ノ下ニ白水ヲ置クモ有リ十二月八日ニハ奉  
公人ハ其ノ握リ餃ヲ糸割トシ奉公口ヲ尋ネ歩キ幾日トナク不在スルモ  
アリ

出生贈答ノ慣習

嫁婿方賣家ヨリ  
親族ヨリ  
近隣ヨリ  
慶家應答

木綿又ハネルメリニス、初衣又ハ些細ノ祝儀  
勉メテ一周間以内ニ贈ル  
ネ、見ト称シ有リ合ノ手土産又ハ布切等  
出生時ハ祝喜ニ対シテ八持ニ馳走セズ茶菓、應接止ム

七 夜 祝

嫁督ノ実家ヨリ

親族

慶家ノ應答

出生ノ時贈リモノナシタル時ハ再ビ行ハズ

同

七夜ト称シ出生日ノ朝近隣ノ小兒又ハ婦人  
健康ヲ祝シ旁生兒ノ祝ヲ兼ネ赤飯振舞ヲ行  
但シ長男長女ノミ外ハ内祝(家内ナシ)赤飯ヲ神相ニ捧  
ケルヲ常トス

# 百一重祝

嫁督ノ里ヨリ

親族近隣ヨリ

慶家ノ應答

長男長女ニ限リ祝着衣類一重ヲ贈ルヲ常トス時ニハ  
相與スル祝儀或ハ現金ヲ贈ルコトアリ次男以下男若ス  
七夜祝ニ贈リタルモノハ贈ラザルヲ通例トス但シ長男  
長女ノ宮参リノ際襟祝ト称シ晴着ニ祝儀ヲ結ヒ付  
ケルモノアリ  
婦人並ニ子供ヲ招待シテ赤飯振舞ヲ行フ嫁督ノ里方  
ヨリ贈ラレタル衣服親戚其他ヨリ贈ラレタル晴着ヲ  
着シ氏神ニ宮参リヲナス

## 三月三日節句ノ祝

嫁督ノ里方ヨリ

舊来雛人形一葎ヲ贈リタリ雛段ヲ設ケ何雛祭りヲ盛

親族近隣ヨリ

慶家應答

一行ハレタリ但シ長男ハ舟難天神ヲ贈ラル  
相成ノ雛人形ヲ贈ラル或ハ共同連名ニテ贈ラルハモ  
アリ

祝ハレタル家主婦人子供ヲ招キ振舞ナシ祝儀受ノ  
家ハ慶中餅ヲ配ル嫁督ノ里方ハハ供ハ餅ノ大ナル  
ヲ晴レトス

端午節句祝 五月五日

節句ノ慣習ニ有ク等シ長男ハ嫁督ノ里方ヨリ武者繪幟但シ及幟  
ニ反幟等アリ勝武軍衣ヲ贈ルモアリ親族近隣ヨリハ布又ハ紙製ノ  
鯉幟ヲ武者人形又ハ之ニ代ハルツキ祝儀ヲ贈ラレタリ  
慶家ノ應答 祝ハレタル家エ供ハ餅柏餅ヲ添ヘテ配ルヲ常トス

種痘園子

長男長女ノ場合ハ嫁督ノ里方ヨリ種痘園子ヲ贈ラル又之ヲ近隣ニ配  
ル親族近隣ヨリ亦贈ラル地主ハ種痘神棚ヲ設ケ祭ル其山高園子ヲ種痘  
棚花ニ神前ニ供ヘテ幼鬼ノ健体ヲ祈ル

三歳ノ祝 尙レモ十二月中

嫁督ノ里方ヨリ 相成ノ晴着一重ヲ贈ラル

親族近隣ヨリ  
施主ハ分ニ應ジタル酒肴振舞ヲ盛大ニ行ハル祝ハレタル家ハ供ハ餅  
ヲ配ル翌年一月ハ晴着ヲ着セテ三島大社ニ必不参拜ニ行ク當時交通不  
便ニテ乘リ物更ニ莫ク大親有員ツテ此ノ時言ヒ事ニヨリノノサツサ今  
ナト行ケバ明神格ノ御塔が見エレル之レハ明治維新前ニハ三島神社境内  
内ニ五重ノ塔高ク徒身エ遠望ナルガ故ナリ

五歳ノ祝

古来五歳ノ祝ニ行ハレタリト聞ケル中古此事莫ク五歳祝ヲ延期シ七  
歳ノ時七五三ノ祝宴ヲ行フニ至レリ

七歳ノ祝

長男長女ノミ家相寄ノ祝宴ヲ成四六ニ行フ嫁娶ノ里方ヨリ分ニ應ジタ  
ル晴着一重又ハ祝儀、近隣親族ヨリ身分相寄ノ反物又ハ履物ヲ贈  
ラレ兩隣ノ人ハ村中戸毎ニ金参聖宛ツ集メテ村惣代トシテ持参スル  
例トス

慶家ニ於テハ佳キ日ヲ送ミ供ハ餅ヲ作り祝儀受ノ名家ニ配リ且ツ主人

主婦ヲ招キ一タノ宴ヲ催シ答礼トス一方其ノ日又ハ聖朝近隣ノ子供ヲ

招キテ赤飯振舞ヲ行ヒ晴着ヲ着用シテ氏神参拜ス又親ハ村中戸毎

御礼廻リヲナス翌年一月必不三島神社ニ参詣ス

道祖神祭 きいの神 (幸の神の義)

正月の供物ハ道祖神ノ祠ヲ作り四ツ車ヲ付ケ各戸ニ引キ入レ燈明ヲ献ジ  
 供物ヲ供ヘ男竹ノ太キヲ立テ之ニ色紙大いノ達摩手其他鏡面病子等  
 ヲ飾リ付ケ(オンベイ)ト称シテ之ガ華カナルヲ競ヒタルモノナリ而シテ  
 一月十四日未明(ドンド)ト焼ト称ス各戸ノオ飾リノ松燵掃竹ヲ注連縄  
 等ヲ道祖神ノ前ニ集メ之レヲ然焼シ各戸ニ於テハ園子ヲ焼キ一家  
 全員之ヲ分ケ食スル時ハ遠ノ病ニ冒サル、コトナシト云フ此時小學校  
 童ハ書初メヲ煙ノ中ニ差シ入レ高ク昇天スルヲ自慢トス  
 焼園子ハ凡ノ三郎ト云フ燒園子以外ニ神佛供スルモノ及ビ庭飾ニスルモ  
 ノヲ作り桎及ユナラ等ノ外小枝ニ園子ナ南山ヲ加子等茅葺葺船小  
 判等夫レノ形ヲ造リ其ノ枝ニ神シ以テ其ノ年ノ豊作ヲ神佛ニ祈願スル  
 モノナリ

入學

昔ハ何レモ寺小屋ニ入學教師ヲ御師匠称ト云フ先ヅ(いろは)名頭村名  
 付国名算術教字(横)文字ノ(之)ハ無シ御手本ハ何レモ御師匠称ノ自筆  
 ナリ珠ニ手習ヲ重ンズ机文庫ハ各自持参ス書初ハ有リ合セ又ハ他家ヨ  
 リ借リ更ケ書物ヲ持参シテ教ヲ受ケ氣月給ニテ盒暮正五節句、贈り物  
 ノミ試験ヲ(オサライ)ト云フ毎月一回ハ清書ヲ成スニ筆位ヲ普通教育ノ

如シ七月七日七夕祭ト云フ新竹ヲ外庭ニ立テ朝早ク起キ里芋ノ葉ヲ以テ朝露ヲ取り硯水トシ短冊ニ歌ヲ書キ(七夕ヤカギ、おの液セる梅ヤ天ノ門トカ云フ歌ヲ書キ新竹ノ枝ニ何ヤ枝トナク付ケテ祭ルナリ聖日之ヲ川ニ流ス天神講ヲ執行女子ハ雛祭合盆金等ノ美矣ナリ有セリ

學校創立

明治六年六月函南學校創立始メ大土肥妙高考ヲ倣ニ用リ明治八年新築上下十六級アリ明治十二年一月八日火災ニ罹リ校舎全部烏有ニ歸ス  
明治十三年二月再建築竣工

柏谷分席

明治十三年八月創立下等科七級 (柏谷愛宕堂)  
明治十九年三月廢止ス

元服 (十五才)

柏谷ハ柏谷連ト称シ一ツノ團本ニ加名スルニ倣親ヲ立テ御誼一升ヲ持テ加名シテ幼名ヲ改名ス之レヲ名付親ト云フ始メテ男子一人前トナルニ世話人又ハ中老有リ字内有志ノ内ニ人ヲ選ミ後見ヲ頼ミ春秋ニ季ニ山ノ神ヲ祭ル神明社ハ城山ニテアリ名月十四日祭ル最良神社ハ三十一日氏神ハ四月十日御神燈ヲ献シ城山ニテ祭ル田代平作トテ

祭典ノ費用トナス

伊勢参宮

往時伊勢参宮ヲ為ス者何レモ青年時代ニテ其ノ年ノ豊作ヲ見テ十二  
 月頃ヨリ催シ村ノ戸長役人ニ申出許可ヲ得中年ノ人ヲ世誥人ニ頼ミ  
 兄ノ許可ヲ得テ明年一月早々出発ス親族近隣ニ於テハ分ニ應ジ草鞋  
 ト杯シ餅別ヲ贈リ見送りヲ成ス先ツ一同ハ氏神ニ参拜シ伊勢参宮ヲ  
 シ下向ナシ得ル杯神主祈願ヲナシ村ノ境近見送り留守宅ニハ留守見  
 トシテ餅又ハ金品ヲ親戚近隣ヨリ贈ラレ又近隣ノ者ハ留守宅ニハ六八ギ  
 杯シ門口注連縄ヲ張りテ祝賀ス施主ハ七里ビマケト云フ伊勢桑木名ノ  
 渡即ケ七里ノ渡舟マリ之ヲ無事ニ渡ルヲ祝フトテ振舞ヲ行フテ餅別受  
 ノ名戸ヲ招待シ又留守宅ニテハ毎朝豆ヲ煎リテ無事帰郷ヲ祈ル往復ニ  
 十日位ニテ帰郷此時親族ノ者一ニ名暗着ヲ持参シテ三島迄出迎ハ三島  
 ニ於テ禮服着用ニテ大社ニ御礼詣リテ至シ外ニ自宅ヨリ末裔ノ用意ヲ  
 為シ荷倉但シ真鍮倉ニテ五色巾ノ飾リ付ケ馬丁ヲ付ケ三島市ケ原ヨ  
 リ春駒ニ打ケ跨リ意氣揚々ト走ラス道路馬上ヨリ花菓子ヲ撒キ村一  
 ノ出迎ヲ受ケ氏神ニ禮拜シテ自宅迄送り込マル而シテ家ニテハ近隣親  
 族ヲ招キ酒肴ヲ饗養應々翌日同行一同ニテ村中毎戸ニ皇大神宮ノ神符  
 ヲ配リ御禮廻リヲ致シ其ノ夜ハ先集ノ敷ニ於テ同行振舞ヲ盛大ニ行フ  
 フ例トス最モ先集ハ村中協議ノ上之ヲ定ム其ノ翌日ハ他州親戚ノ神



符土産物等ヲ持考礼迎リヲナス又土産初ヲ受ケタル家ニテハ参考本人  
 ヲ招待シ酒肴ノ御食應ヲナス費員ニ費用多大ナリ道中ノ服装ハ伴天着  
 物ニ淺黄ノ股引脚絆管ノ笠ニ草鞋履キ手拭ニテ頬カムリ

青年訓練

青年訓練所令第一條ニ依リ青年ノ心身ヲ鍛練シ國民ノ資格ヲ向ニスル  
 ヲ以テ目的トス 設之ハ大正三年六月二十三日

團體員ノ資格 滿十才以上二十才以下ノ男子  
 事業年度始四月一日終翌年三月三十一日

任古ハ知ルニ由テシ寛政時代ハ若者ト云フ男子十五才ニシテ始メテ元  
 服シテ名ヲ替エ假親ヲ立テ中間入レテ元服祝ヲナシ男一人トナシ  
 尚時ノ若者連ハ近村ノ祭典等ニ出テ喧嘩ニ勝テ誇リトシ又大湊大食  
 ヲナシ博戯ヲ好ミ芝居角力ノ遊ヒヲナス慶應時代迄柏各連ト稱シ遊ヒハ  
 (カイモン)角力ヲ踊リ俳句其他仕事ノ競争 明治初年柏各連ハ角力博戯大  
 食カラ和歌俳句鶏ノ争鬪勝負ヲ好ミ鬪論笛大款浮レ節等ノ遊ヒヲナス  
 明治三十年頃ヨリ青年会ト改ム 笛大款浪花節 辯論天句連ト称シ  
 浪花節遊興業行ハル 明治四十二年函南村男子會 青年團創立 男子  
 青年團員ノ修養機關トシテ設立ス十五才以上二十五才以下ノ男子ヲ以  
 テ組織ス 補習教育 講演會 辯論會 體育競技會、武道大  
 會 手工 作物品評會 青年訓練 視察旅行ヲ行ハル